

昭和二十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十二年八月廿日印刷納本昭和二十二年九月一日發行

第十三卷

第八號

浄土

九 月 號



目次

浄土の存在について……………(二)

中村辨康

殺生戒と道德の根本……………(四)

瓜生 靖

身から出たサビ……………(六)

山本洋一

○大きな心……………(八)

吉原元明

○信仰相談……………(二)

中村辨康

大いなる愛(二)……………(三)

東しげと

編集後記……………(一六)

法然上人鑽仰會發行



淨土の存在について

中 村 辨 康

緒 言

此の問題がハッキリ判れば佛教が他宗教と絶對に異なる特色も明らかに、また淨土教の眞髓もわかると思ふので、今までに幾度もこの問題や、之に關聯した幾多の諸問題を取扱つて來たけれども、それが短篇であつた爲に言葉足らずして不明瞭な點もかなり多かつたから一まとめにして數回に亘つて之を明かにしたい。若し少しでも御参考になれば筆者の幸ひである。

第一章 存在觀念に就て

佛教ではあくまでも事物を存在として見て居る私達の觀念を否定する。物事を存在としてのみ見て居る私達の考へは全く間違ひであつて、それ故にこそ人間生活は「迷ひ」であり「惑ひ」であつて、そこに執着も起り煩惱も起つて三界から離脱が出来ないのである。

そもそも三界とは欲界色界無色界と云つて、色界とは物質の世界を云ひ、無色界とは形而上の理念界を指すのであるが、此の物や心の考へやは畢竟「欲」を伴ふものであつて、欲の世界は色界無色界にも密接な關係があるのであり、そしてそれは何れも存在觀を基盤として立つて居るものであるから、三界のことを一に「三有」とも云つて居る。(有とは存在のこと)

また業感緣起と云ふものがある。それは十二因縁のことであるが、この配列を見ると、まづ「病死」と云ふ苦の代表的なものを取り出して來て、その原因は「生」にあり、それはまた「有」即ち存在觀にあり、そしてそれは「取」即ち執着にあり、「愛欲」にありと、段々因縁をたどつて行くと最後には「無明」即ち盲目的な「無智」にまで到達するが、その無明の働き(行)に依つて起る「識」は要するに顛倒心であつて愛欲とか執着とか煩惱に悩まされて居るのであるが、それは物の見方を存在と

して見て居るからであるとして居る。

元來存在觀念なるものは事物を空間的にしか見て居ないのである。然るに空間に物があるにしても、時間無しにはあり得ないのである。時間と空間とは二にして一、一にして二なるもので、空間時間は觀念として獨立して考へ得るとしても、元來空間と時間とは即一的なものであつて單なる存在ではあり得ないのである。

それ故に佛教では諸物を諸行と云ひ、諸事實を諸法と云つて居る。即ち單なる物や單なる事實はないからである。即ち「行」とは動くことであるが、諸物は單なる存在ではなくして常に動いて止まないものである、即ち刻々に變化して居るものである。だから「諸物」ではなくして「諸行」なのである。また「法」とは法則とか規範とか云つてよりよく生る上に則つとるべきお手本であるが、それはよきことに則つとりよきことのお手本として行はれることであつて固定した存在ではないのである。然しかう云ふと、それでは物は存在しないのかとすぐ反問したくなるが、存在否定即「無」と考へることもまた存在觀念なのである。即ち「有」と云ふも「無」と云ふも共に存在觀念である。即ち有無の二邊を離れなければ本當ではないのである。有るとか無いとか一方に片寄

せた考へを「邊見」と云つて、邪見の一つにして居る。之が即ち迷ひの迷ひたる所以でもある。この邊見を離れたのが中道であり、また般若思想で言ふ「空」である。空と云ふとすぐ「無」を思ふから、それをまた否定して「空々」と云ひ「大空」と云ひ「畢竟空」と云つて有無の考へから離れしめやうとしたのであるが、中々容易に理解が出来ないものらしい。

この「離邊處中」を「生きる」と云ふ考へにまとめたのは椎尾博士の一大卓見であるが、この「生きる」と云ふ考へこそ「有無の二邊」を離れた積極的理解である。結局存在觀念を否定して「生きる」と云ふ考へに更生させるところに佛教の特色があつたのである。

然るにこの原始佛教的理解は段々複雑化して理論が混雜してしまつたが、木村博士なども「佛教は元來固定的原理を立つることなく、寧ろ現象としての動くままの宇宙人生を以て與へられた事實と見做して、それより次第にその動く所以の内面の力なり法則なり因果關係なりを見出さうとしたものである」(解説への道二六六頁)と云つて居られる。椎尾博士ほどハッキリはして居ないが動く現象と見て固定した現象とは見て居ないことに注意されたのである。



殺生戒と道德の根本

瓜 生 靖

英國の文豪バナード・ショウ翁の遺言中に次の文句がある。

「仲間の動物を食するよりは死がましである。私の葬式には弔者を乗せた馬車は要らない。その代り牛羊豚鶏、それから水を張つた硝子の箱に入れた魚類の葬列をつくり、これら可憐な動物たちに白の喪章をつけて柩を送らせよ。」

此中にはショウ一流の皮肉と多少の銜氣が認められる。だが翁にさうした氣持があつた事だけは肯かれると思ふ。

ショウは、ロシアのトルストイと共に、嚴格な菜食主義者である。フアビアン・ソサイティを建設して始めて英國に公然と社會主義運動を開始した翁は、亦菜食運動の先驅者だつた。現在ロンドンには菜食専門の料理店が數軒あるが、いづれも相當繁昌して居り、一番古いシアンスなどは、既に堂々一流店に伍してゐる。

トルストイは「第二步」を著して、人道の第一歩は克己にある事を力説し、屠殺場の悲惨をあますところなく描寫して肉食の罪惡を絶叫してゐる。

ショウは肉食を廢して死んでも本望だと云つた。だが去年九十歳の誕生を祝つた彼は、猶心身共に甚だ健かである。肉食を非人道の見本のやうに呪つたトルストイは、八十二歳の高齡を緯々と

して生きた。我が國でも古來高壽を保つた高僧智識は嚴格な菜食者だつた。他方、純醫學的、生理學的立場から、フランス、パスツールの積學等は今から三、四十年前も前に菜食の優越を立證し、人間が若し肉食を廢したなら、八十歳位が壯年期で、百二三十歳は長壽でも何でもないと云つてゐる。

といふのは、人間の腸は大體身長の二十五倍あつて、肉食獸の腸に比べて非常に長い。此長い腸内を肉類が通過する間に若干の腐敗作用が起る。此腐敗が胃腸疾患の基をなし胃腸疾患は直接間接に致命の因を作る。ドイツ、ロシアの學者、醫師等で同様の事を主張してゐる者も尠くない。

私は今ここで菜食優越論を書いてゐるわけではない。ただ道德論だけでは實際の保健がおぼつかないといふ反駁に對して、例證の一斑を示したのに外ならない。そして私自身近年大體菜食を勵行してから、著しく身體の工合が良くなつた事を附け加へておかう。

佛教では本來、淨土眞宗を除いて、肉食を禁じてゐる。肉食を禁じるのは即ち殺生を戒めるからである。五戒十惡の第一は殺生である。十善の第一は殺生戒を守る事だ。然らば佛教徒たるもの

五戒の中他の四戒、即ち偷盜、邪淫、妄語、飲酒は守り難くともせめて第一の殺生戒位は守り、或は少くとも守らうと努力すべきであらう。先般來朝した英國佛教協會の總裁クリスマス・ハンフレイ氏は、日本に來ていたるところの響應で肉類を出されて大變迷惑してゐた。勿論一箸もつけなかつたけれど、同席の日本佛教徒と稱する人達が、ピフテキやトンカツに舌鼓を打つのを黙つて眺めてゐた。

戦争は凡ゆる罪惡の總和である。戦争の基本的實行要素は殺生である。而して凡ゆる罪惡の最後の實行が殺生となつて現れるのだ。若し凡ての人類が斷じて殺生を回避するならば、戦争は起り得ないだらう。殺生は愛の缺乏の赤裸々な實現である。慈悲心の惡心への恥づべき屈服である。苟も一片の慈悲心を持ち合せてゐたなら、「手をすり、足をする」蟬に對して、「やれ打つな」の句が心頭に浮かぶべきである。孟子は佛教徒ではなかつたけれど、我が食膳にのぼされる動物の斷末魔の聲を聞かぬ爲、「君子は庖厨を遠ざく」と教へた。

貪婪情痴憎惡怨恨、是等の惡の數々が、慈悲を征服して人間の心に凱歌を擧げる時、殺生は何の不思議もなく平然として行はれるのだ。故に佛教では殺生戒を戒の第一に置き、殺生を惡の第一とする。

由來日本は佛教國である。然かも今日程各方面で佛教精神の實踐が地に墮ちた事は恐らくあるまい。ショウもトルストイも本來基督教系の人である。現在日本で佛の教を説く人は多い。けれども、「佛心とは大慈悲心これなり」といふ根本眞理の大磐石の上に

立つて、嚴として殺生の非を叫び、肉食の美を唱へる人が何人あるだらう。山中に虎に出遇ひ、虎を殺すより自分が食はれるのを選むだ菩薩の行は及び難いかも知れないが、せめて其精神だけでも解したなら、自分は元より、他人の殺生を犯すのを止めるだけの誠意はあるべきである。

法然上人は信行の一致を強調した。今日の佛教の衰退は、蓋し餘りに行を疎じた當然の結果ではあるまいか。殺生戒をさへ守れない者に、「一切衆生悉有佛性」も「六道衆生皆是我父母」の眞理も、畢竟空念佛に過ぎないのは、亦止むを得ない次第である。

もう少し云はせて貰はう。日本では夏になると子供が蟬や蜻蛉を捕へて虐殺して娛しむ。歐米文明國では見られないさまだ。だが誰も之を怪しまず、とめようともしない。かういふところから無邪氣なるべき子供等が自然と殺生に親しみ、殘忍性を育くむやうになる事を氣もつかず、従つて憂ふる者も稀である。往來で犬殺しの殘暴も亦默過されてゐる。ひとたび情操教育と精神的文化といふことを考へる時、これは恐しい事である。

酒を山門内に入れないと書いた石碑を門前に建ててある寺は多い。然かも境内では兒童をして恣に殺生を犯し、犬殺をして殘虐行爲をなさしめて怪しまないのは、遺憾である。

彼も生きてゐる。我も生きてゐる、此事實を魂の奥底に痛感する時一視平等無際限の慈悲心が湧き起る。殺生戒は此一つの所産である。道德の高揚も社會正義も、乃至は社會改革、國際平和も、詮ずるところ此認識に立つて、そこから第一步を踏み出すのでなければ竟に空中樓閣の儚さに終るであらう。

身から出たサビ

工學博士 山 本 洋 一

八月二十七日の東京裁判についての新聞記事にわ、日本の陸軍が太平洋戦争を準備していなかつたということを證明するために元陸軍兵器行政本部の吉永義尊氏が、すべて寒地用につくられた陸軍兵器が南方に轉用されたために防濕装置不十分で使用不能となつた兵器が多量に上つたとのべられたとでていた。

南方が暑く、しかも湿度が高いので鐵を主としてつくられた兵器がサビで輸送の間にも、また保存中にもイタンで使えなくなることも當然である。鐵は強く丈夫な金屬である。しかしながら表面に水がつけば空氣中でサビる。サビはモロクで弱い化合物であるので表面からサビに變るだけ鐵そのものの強さへる。そのうえサビはガサガサして鐵そのものよりもかさがかさで大きいので動くべきところにサビツギをおこさせてしまうのである。

南方で温度が高く、しめり氣も多い、したがつて夜に入つてツメタくなつた鐵の表面にあたたかい空氣がふれば、空氣中の氣分は露となつてあらわれて鐵表面にサビを生じさせかたが早い。それ故に鐵表面をしめらせない様に防濕してサビを防ぐことが大切になるのである。兵器でわすれあつて動くべき場所が多いのでペンキであるとか、メツキなどをほどこすことができないので手入をしないときにサビを生じ易いのである。兵器を使つて手入をよくしている所であればサビさせるようなことわれない。然

しながら輸送中や保存している間に於て自然とサビることを防ぐにわ包裝或わ荷造りに非常な注意をしなくてはならないわけである。

北方の寒地に送るときと南方の場合とでわ取扱いかたも大にちがうのである。日本の陸軍が太平洋戦争を豫期していなかつたからといえ、人の生命をやりとりする戦争に際して此の不注意をして使えない兵器を澤山にだしてしまつたといふことわ、まことに身から出たサビであるが、全く以て國民に對して犯した陸軍の罪の一つである。

幕末の先覺者佐藤信淵が宇内混同秘策といふ本の中に「日本の土地に妙なることわ、南方の敵國あることすくなし、故に意を専らにして北方を開くことを得べし」と書かれている。それ故に日本の陸軍が北方だけを考へていたのかもしれない。然しながら信淵が『もし南海に寇あるに及んでわ防禦すること甚だ難く、ややもすれば皇居も騷擾して忽ち困窮を受くるに至る』とつづけている。

日本が此の先覺者の言葉とほりに南に事をかまえて遂に此の敗戦のうき目を見たのである。

私共が常にあらゆる事柄の真相を明らかにして正しき道を進まなくてはならないのである。私わ鐵のサビといふことについて、

ひたすらに研究をつづけている一人として、太平洋戦となつてから陸軍の技術陣に於て、兵器のサビを防ぐことに對して努力をした。然しながら戦わ信淵の豫言の如き結果として終りをつげた。

とわいえ、私わ鐵のサビについての問題わこれからのことだと思ふ。八月十五日から貿易わ再開された。日本の市場として大切なところの一つわ南方である。此の南方に送るべき鐵製品のサビ止めということわ、なかなかの問題である。現に見返り品として輸出した自轉車の塗りが悪く、メッキが剥げてサビを生じ易いという非難を聞いているのである。私共わもはや二度とアヤマチをくりかえしてわならないのである。アヤマチをくりかえすということをしてわ日本が文化國家としての再建わできない。

鐵わサビ易い、サビるのわ當り前であるという考え方わ正しくない。サビるにわサビるだけの因縁があるのである。表面に直接に空氣と水とをふれさせなければ、鐵といえどもサビるものでわない。よい塗料を用いて完全なる塗りを行なうこと、メッキもよく注意して適當な厚さにつける。心をいれて立派なものをつくることが大切である。物をつくる人の心がけをよくしなくてわ立派なものわつくれないのである。南方に送つた兵器がサビて使えなかつたことによつて苦しんだ、その經驗を日本の經濟再建のため輸出品の中に生かさなくてわならない。

サビを防ぐということわ鐵製品を生かすことである。サビさせさえしなければ、鐵の強くて丈夫であるという本質わ永く失なわれないわけである。サビ朽ちてアブナクなる心配がない。私わ佛とわホツトケである。ホツテおいても大丈夫なもののことであるということわきいた。鐵を佛にする、それわ鐵を大丈夫にいつま

でも使えるようにすることであり、サビを防ぐことによつて鐵をホツケにすることができふ。

鐵を生かして使うということ、それわ科學の仕事であるが、その中にわ宗教的の心がある。佛教でわ物と心とわ互に通じているということわ教えている。物あつて心があり、心あつて物があるのである。鐵というものがあつて私共の文化がつくれ、心豊かに楽しい生活がなされている。私共わ鐵というものの恩を報ずるために鐵そのものを大切にしてムダなく、その本質を利用してやらなくてわならない。

鐵を大切にせず、サビさせて平氣でいれば、やがてわ自らの損をまねくということになる。ロープをサビるにまかせていたために、それが弱くなつて吊橋が落ちたという例わ少くない。石炭三千萬トンの生産がなかなか思うようにならないのも、炭坑のポンプ、パイプ、レール、炭車などがサビでイタムためだ。食糧問題の解決のカギである肥料の生産も機械裝置のサビによつて多くならないのだともいわれる。サビによる困難わかなり多く、實際に人を苦しめるものである。サビを防いで、サビをとめるということの大切なわ此の故である。

サビさせて平氣でいることによつて、苦しみを招くことになる。自業自得である。まことに『身から出たサビ』とわこのことである。

物をつくると共に物を大切にするとところに、私共わ科學と共に宗教の必要性を強く考えなくてわならない。

大 き な 心

明 元 原 吉

人間は人から勸告を受けて仕事をする事になりますと、どうも仕事に油がのりません。

人前を飾る、形式に流れる。自分からすすんで仕事をする時は、人が居ようが、居まいが人は問題ではない。喜んで仕事が出来ます。之れは畢竟醒めた精神から發足するからであらうと思ふ。萬事私共が爲すべき事せねばならぬ事は、凡てかうした醒めたる根本理念から出發したいものと思ふております。

今日我國は國土はせめられ、文

化は破滅し、多數の人命を犠牲になし、餓鬼と地獄の苦しみにつれております。此の敗戦の姿も基く所は、此の根本理念の反省が足りない結果かと思ふのであります。

我國の一部には今日の此の現相に付いて、日本は再建どころか破滅であると悲觀しておる方がありますが、私共は決して悲觀しない法然上人は往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定と申されてあります。要は、私共の心構への問題と申します。私共が眞に、自覺し協力精神に由り、軌道に乗つてやれば、文化國家、平和國家は、再建出来るものと堅く信じております。

私共は今日ほど大精神を要する時はないと信じております。

私共の云う大精神とは、佛の精神を云うのであります。此の佛の精神とは、人間釋迦が人間苦に覺醒され、人間苦と戦うて、佛釋迦になり玉ふた悟道の精神をさすのであります。此の悟道の精神とは、宇宙法界に永遠に生きゆく力が、凡ての物に、ささげ玉ふ、はげみ玉ふ、建設的の力として修道釋尊の心に體得し玉いし徳光莊嚴のあたたかい活躍せる絶對的人格者の大精神を申すのであります。之を彌陀本願の力と申します。

我國の産んだ宗教界の巨匠、親鸞上人、法然上人、其の他の先輩、高僧は、當時の思想界を健全になし、精神的に日本を救はれた事は御承知の通りであります。親鸞上人は、歎異鈔の中に云ふてある様に、法然上人の行かれる所は地獄にでも御伴をされると云はれるほど、絶對的大信念がありました。法然上人の如きは、首はとんでも念佛は止められんと、嚴然たる仰せでありました。此等の上人は大精神が燃え上つていたからであります。

然らば此の大精神を如何にして、私共は體得するか、如何なる方法で、此の大精神に入るか、此の點が宗教として大切であります。宗教は理論でなしに事實でなくてはなりません。大精神をどうして身につけるか。

それは即直に申すと現實の自分を知る事です。特に現實と云ふ冠詞を加へました。切れば血が出る、慾に使はれる、僅かの事に腹が立つ。どうしようもない。此の弱弱はしい自分を現實の自分と申すのです。此の自分を自覺するのです。

ソクラテスと云ふ哲學者は、汝自身を知れと云ふた事は古い言葉です。然し、古くともわかかわかしい新しい言葉です。源信僧都は、夜もすがら佛の道を求むれば、我が心にぞ尋

ね入りぬる、と仰せられましたが、宗教の入口は遠きに求むる必要はありません。然し此處に注意したい事は、自分を知ると云ふ事は能く云はれる事です、從來は此方法に付いた親切が足りないのではないかと思ふのであります。知るに付いて方法は尤も注意すべき事と思います。

普通に宗教では佛とか神とか申します。佛教には佛とか如來、法性、悟り、種々と縁遠い語を使用します。どうも凡夫と餘りかけはなれております。殊に佛教には各宗旨が澤山あります。こうした事が、一つには佛教精神を我が身にうる事も妨げしているかとも思われます。

現實の自分、之れは尤も近い、縁の厚いものです。然し尤も近い事實のもですが、之れを知る方法になりますと、御互に注意せねばなりません。反て他人の顔は、知り易いが自分の顔は知り悪い。鏡で知つても、之れは寫した自分で、眞の自分は知り悪い様に現實の自分を知る事は簡單にはゆきません。それに自分には慢心があり、慾が付きまふものですから、此點を用心したいのです。

佛教には知る事を聞いて知る、噛みしめて知る、實行して知る、つまり外から知る事と

内から知る事と説いております。

今自分を知る事は、自分を反省するのですから、自分道徳行爲眞理の法を實行しているか否か、自分の心持ちを内に問れて尋ねて見ます。親鸞の愚禿の文學、法然の愚痴言葉、此れを自分の上に觀ていられる事を能く、かみしめて見ます。かうゆふ現實の自分を正直に反省してみますと、生き死にの世界、罪の世界、之れは私共の永遠の世界でありました。それゆへ苦しみの枠の中に、一步も出ないのである。此のまま放任すれば地獄一定の凡夫、苦しみと闇みと流轉する流轉の凡夫がはつきりわかります。納得が出来ます。ここ迄きますと、知る事は私の氣持ちは一步進んで動かない信ずる所迄罪の凡人たる事が分ります。ここ迄ほりさげて、きますと限りなき本願大他力の絶對の大精神と、歸依合掌するのであります。阿彌陀佛、助け玉への歸命の心が起り、心に助け玉へ、口に南無阿彌陀佛助け玉への心と南無阿彌陀佛の行い、信行是足内外一體の南無阿彌陀佛、之れを稱名する丈であります。稱名する所に大きな意義があります。燃へ上がる力の聲であります。此の燃へ上がる力あれば、仕事が出来ます。南無阿彌陀佛するばかりです。之れは囚はれない大

きな強い力であります。慈悲の親心で自分の計らいのない信仰の極點です。南無阿彌陀佛の生活、佛と共の生活であります。

元來私共は人前に出ると外行きの心が起ります。見榮坊を張ります。強がり云ひます。我を張ります。小供に死に分れる、死の宣告を受ける、何か失敗をする、とすぐ弱根をはきます。之れは凡夫の偽りない氣持ちです。私共は心に空虚を感じますと、冷めたい生活をする、あたたかい生活を望みます。暗い生活をする、明るい生活を望みます。苦しい生活をする、のんびりした生活を望みます。小さい生活をする、と大きな精神生活を望みます。之れも人間の眞理です。佛は苦みの世界と説かれました。之れは凡夫の見た世界です。だから凡人としては當然宗教に進むのです。

苦しみつつ苦しみを逃避する、此の態度は間違ひです。世界自身に苦樂はありませんが凡夫は何處にゆくも苦しみの世界です。だから苦しみをつきすすんでゆくのです。地獄の底に極樂があるのです。

世間に、苦しみぬけ、あたつてくだけよと申します。特に敗戦の日本です。苦しみが多くなります。まだまだ、苦しみは之れからで

す。此の苦しみから得た楽しみ、之れが精神的に得る永遠の楽しみです。外に楽しみを得ず、内に楽しみをうるのです。彌陀無礙の光明に接した時、佛の中に自分が見えます。始め慈悲の佛と、求むる自分が、二つに分れても、助け玉へ救はせ玉への現實の自分が佛を信じたる時は、二者一體となります。即ち南無阿彌陀佛する境地です。弘法大師の有爲の奥山を越えた信仰の極致は洋々たる大海の如き境地にして、ここから平和國家が生れてくるのであります。我國は新憲法に依り永遠に武力をすてましたが、平和國家を再建して世界平和に貢獻する道は宗教の大精神に基づく外はありません。(をほり)

自然の美しさ

この頃のように、自然の美しさに目をみはることはない。

急に思いたつて、富山の友人を訪れたのは初秋のことであつた。喧騒と混雜の夜行で上野驛をたつて、もみくちやのまま寝もやらず汽車に身をまかした。とがりきつた乗客の神經で、うすぐらい車内は殺氣だつていた。窓

外はまつくらだ。はてしないやみの世界がつづいているようで、目をつぶつても落ちついてねむれなかつた。旅行の愉しさなど、たえて味わえないこの頃ではあるが、夜汽車はまたかくべつだつた。

夜がほのぼのと明けそめたのは、もう信濃路にはいつてからであつた。窓にうす明りが見えはじめると、私はほつとした。汽車は山間をはしつていた。魅せられたように、私は窓外の景色に見とれた。乳色の新鮮な大氣の中に、初秋の山々が、或は黄色に、或は濛い綠色にほのぼのとけぶつてゐる。私ははつとした。心を洗われるような氣がした。こんな清らかな美しさが、かつてこの世にあつたであらうか。私は名もなき秋草にも、いぶせき民家にも、そして何の面白味もない山肌にもこよなき美を發見して、驚異の目をみはつていた。

昨夜の乗車から夜明けまでの、あの混亂と我欲の世界が、別世界のように考えられはじめた。車内も急に清らかになつたようにさえ思われた。

汽車は走つた。次々に思いもかけない美し

い景色をもたらしながら……。

山地を出て平野に出た。稻が黄金の波に喜びおののいている。林ご林にかこまれた農家が、ぼつりぼつりとその中に靜かに横たわつてゐる。そして、おお、まつ赤な林ごが枝もたわわにみのつて、朝日に照りはえてゐる。なんと自然の美しさであらう。

—あの林ごがここでは一貫目百圓から百二十圓ですのに、東京にいくると四百圓から五百圓にもなるんですよ。

私の横の四十がらみの奥さんが、うらやましそりにさざやいたが、私の耳を素通りしてしまつた。私はただ美しさに魅せられて、汽車の規則正しい律動に氣持よく身をまかせていた。

汽車は豊野驛にはいつた。驛は秋花でかざられていた。驛員の奥床しい心がしのばれてうれしかつた。

これは東京のかさかさした生活からぬけ出た私の感傷かもしれない。しかし、自然の美にうたれ、心にうるおいを得た喜びは大きかつた。そして戦いにまけても、美しい自然をもつてゐる日本は、この上もない幸福者だとしみじみ考えた。(A生)

信仰相談

信仰上の悩みや佛教についての疑惑にお答えします

擔當 中村 辨 康

十八願と二十願との差異

(問)

四十八願中第十八願及二十の願は共に念佛往生の願と承つて居りますが、兩願は如何なる點が違ふのでせうか。

(長野・下伊那・K T 生)

(答)

第十八願は「十方の衆生至心に信樂して我が國に生ぜんと欲して乃至十念せんに若し生ぜずんば正覺を取らじ」と云つてあり、第二十願は「十方の衆生我が名號をきいて念ひを我國にかけ諸の徳本を植ゑ至心に回向して我が國に生ぜんと欲して果遂せずんば正覺を取らじ」とありますそれで何う違ふかと云ふに、第十八願の方は「至心信樂して念佛す

る」のであり、第二十願の方は「名號をきいて念ひを淨土にかけ色々の善根功德をつんで至心に回向する」のでありますから、淨土は念ずるが念佛ではありませんし、聖道門的な善根功德をしてそれを更に淨土の方へふり向けると云ふ二重手間をやつて居ります。つまり念佛になり切れないのであり、第十八願を本當に信じ切れないのであります。ですから第十八願の方は「若く不生者」と云ひ第二十願の方は「不果遂者」と云つて居るのです。即ち第十八願の方は直ちに往生するのであり、第二十願の聖道門根性の抜け切らない人の方は

至心に回向して極樂往生を望んで居るのだからその因縁に依つて二生三生の後には必ずその望みも遂げられやうと云ふのです。廻りくどいことをするから淨土往生も廻りくどくなるので、これは仕方がありません。

第二十願 往生は約束されては居るが今ますますと云ふ譯ではありません。

第十九願 臨終に來迎を受けるから順次の往生は出来るが、本當に本願を信じ切つて居な

いから畢竟眞實の報土往生ではないかも知れません。

第十八願 一番直接な念佛信者でありますからこれが一番正しい人であります。

尚ほ眞宗では三願轉入と云つて自力から他力の心に轉じて行く順序であると説明して居りますが、さうきつちり几帳面に行くか何うか、人々それぞれ心も違ひますから、もつと異つた轉入の方式もあらうかと存じます。

淨土教になぜ多くの派があるのか

(問)

鎮西、西山、長樂寺、九品寺、眞宗、時宗等同じ淨土三部經を根本とする淨土教で

あり乍ら各教義の内容に異りがありますが、それは各派祖の解釋の相違に依るのでせうか。(熊本・天草郡・

飯田生

(答)

支那の藕益大師は「禪教律の三及び種々の一切の

三昧は淨土の法門より流出せざるはなく淨土の法門に還歸せざるはなし」と云ひ「藏通別圓も悉く念佛の法門ならざるはなし」と云つて居りますが、さうまで言はなくとも、昔しは(奈良朝平安朝を通じて)各大寺には念佛僧と云ふものが居たのですが、法然上人以後大體聖道門系統では念佛をきらひ初めまして、念佛と云へば淨土教に限るやうにさへなつてしまひました。それでもまだ融通念佛宗とか今度別立しました天臺眞盛宗などは聖道門中の念佛中心の宗派として残つて居ります。

同じく淨土の三部經を正依の經典として居りましても、殊に大經などは、中々内容的には深く廣いものがありますから、解釋のしやうに依つて大きな差異を生じますのは當然であります。今お舉げになりました六つの宗派の内長樂寺

九品寺の二派は既に消滅してしまつて居りますから論ずる必要もありませんまいし、また眞宗、西山流時宗の三は私に取つては他宗派になりますから餘りおしやべりしたくはありません。またして見たところでは割引かれてしまひませう。その上にあなたが専門家でないこととすればこんなことを一々穿索することにも必要はないでせう。法然上人も「學生骨になりて往生や失はんずらん」と仰せられました。餘り穿索しないがよろしいと思ひます。結局物知りになると云ふだけで、信仰には關係がないからですから一々の相異點を擧げることには遠慮して置きます。唯だ御質問の要旨は何故に異なるのか、異なるのは各祖師方の解釋の如何に依るのかと云ふにあるのですから、その通りでございませうとお答へするだけではよいわけですか。ですがそれでは餘りにあつけないから若干蛇足を申し上げなくては相すまぬと存じ以上申上げた次第です。物足りないところはどうぞ御ゆるし下さい。

(問)

病氣などで自分の死期の迫つたのを豫知した場合にも來迎を蒙る心構へが必要なのではせうか。(東京・北多摩・大山保)

(答)

眞宗では臨終來迎無用論を唱へて居るやうであります。また善導大師は「應聲即現」と云つて衆生が、佛を念ずる時聲に出る念佛に必ず如來様が來現されると申して居られます。如來様が私達の眼に見えないだけのことでありまして、如來様の方では必ず來て下さつて居るのです。茶碗と云へば茶碗が思はれおかあ様と云へばおかあ様が思はれるやうに聲に應じてそれが思はれることが來迎なのであるから、見るとか見えな

いとかの問題ではありません。それを見える見えなさにこだわつて來迎不來迎を論ずるならば、論ずる人の信仰がまだ不徹底をまぬかれないと云はねばなりません。元來「來迎」と云ふことは第十九の

死期の豫知と來迎の有無

願に「至心に發願して我が國に生ぜんと欲せんに壽終の時に臨んでもし大衆(即ち極樂の菩薩方のこと)に圍繞せられてその人の前に現ぜずんば正覺をとらじ」とあるもので、唯だその文句の前に「菩提心を發し諸の功德を修して」とあるところから、自力の修行者と考へられ、その人達への願と見る爲に、念佛信者にはその必要はないのだと云ふのでせうが、自力の修行者にさへあるのですから、もつと直接な念佛に來迎のない筈はありません。念佛することその事が既に來迎なのですから、わざわざ斷然なくても來迎は必然的なものでございませう。また死期を豫知するしないで區別さるべき問題でもありません。但しあなたは「心構へ」と仰しやつて何か特別な構へ方をするかのやうに考へて居られるやうに想像されますが、そんな自力的な心構へなどはいりません。こちらは唯だ念佛して居るだけのことでよいのです。念佛するところには必ず來現するものと御信じ下さい。

大いなる愛 (二)

東 しげと

月日は淋しく重々しく過ぎてゆくが、四匹の犬はプリンクレー氏の歸りを、一途に待っている。玄關に訪れる人の足音が聞えると、まづ先に飛び出すのは犬である。出てゆく時の希望にみちたまなざしにくらべて、もどつてくる時の哀れな姿、眼はどんよりとくもり、尻つぼは力なくたれさがつている。悲しみを訴えるように、くんくん鼻をならしながら、奥さんに身をすりよせるいぢらしさ、奥さんは訪客のあらたびに、身のほそる思いをした。話しても無駄だとは知つていてもしつかりだきしめて、「當分は歸らないのよ」と囁くのだった。

夏がすぎて秋がきた。一葉落ちるごとに、奥さんはプリンクレー氏の身を案じた。意を決して英國軍に投じた少佐の宿望が、いつの日にか必ず實現することを、心深く信じてはいるが、それだけ少佐の安否を氣ずかう祈りは強かつた。だが、戦局が日本人の豫想以上に有利に展開していくにつれて、軍部の傲慢はますますはげしくなるばかりである。奥さんの身邊にも疑惑の眼はたかまつていつた。四匹の犬を飼う外國人の妻、親しかつた人々さえ、いつしかうとくなるのであつた。泣いても泣ききれない日がつづいた。日本人の自主性のない附和雷同が情なかつた。

(13)

であつた。プリンクレー少佐をこいしたう姿を見れば、心は千々に亂れるが、愛にうえてすがりつくいじらしい動作は、いつしかすべての悩みをふきとばしてくれる。無心な犬、人間の愛によつて生きていく可憐な動物、いたわつてやりたい衝動が、つきもせず溢れてくる。それが嬉しかつた。犬の世話をする時は、一切のことをわすれて没頭することができた。またその間は、犬を通じてプリンクレー少佐と語りあう楽しい時間でもあつた。

それにつけても、思い出されるのは、プリンクレー少佐の犬の愛しかたであつた。

食事から湯あみ、運動から病氣の注意まで、一切人の手をわずらわさなかつた。奥さんの手をかりることもまれであつた。冬になると少佐の手はひびでいたそうに割れた。犬の放尿でけがれた寝薬を、たえずとりかえるためである。不潔な寝薬をいそいそとはこぶ少佐の顔には、赤ン坊のおしめを始末する母親の、誇りたかい愛情があふれていた。手のひびも、犬にささげる大らかな愛のまえには、なんでもなかつた。あまり犬のすきでなかつた奥さんが「犬も大事ですが、ご自分の手も大事ですよ」と不自由そうな手を見て、注意することもあつたが、少佐は、

この孤獨の中にあつて、氣をまぎらし慰めてくれるのは、四匹の犬

「犬は汚ないと思つても、それを人間に訴えることはできない。こち

らから察して世話してやるのが人間のつとめだ。犬だけではない、すべての動物、生物に對して、それだけのいたわりをもたなくては、萬物の靈長たる資格はない。」

と答えるのであつた。少佐のこの深い愛情はいつしか奥さんを、だいの大好きにしてしまつた。さわるのもいやであつた薬にも、平氣でさわれるようになった。ぶ氣味であつた犬の世話も、平氣でできるようになった。いや楽しみにさえなつた。そして、少佐の感化によつて動物や生物にひらかれてゆく自分の愛情が、こよなく嬉しいものに感じられた。

奥さんは冬深くなるにつれて、少佐のひびだらけの手が、臉についてはなれなかつた。だがそれとともに、遠くはなれて犬のことを心配しているにちがいない少佐の胸中を察すると、犬に對する愛情が、一しお強くわきてくるのであつた。少佐に再び會わせなければならぬ。戦争が終る迄はどうしても守り育ててゆかねばならない。奥さんの決意は一日とかたくなり、愛情はとどまるところを知らなかつた。文字通り犬と起居をともしした。乏しい自分の食糧をさいて犬に與えた。外出も犬のためにとだえがちになつた。犬にささげた奥さんの生活は、近所の人にはおかしいほど、人と犬との一體の生活であつた。一方、戦局はしだいに日本に不利に展開しはじつた。大本營の發表は、相變らず日本の勝利をうたつていたが、連合軍はじりじり本土周邊にせまつてきた。冷靜を失わない人なら、軍部の理性を逸した無軌道ぶりの中に、必勝の目算を失つた狼ばいとあせり氣味を、觀取したはずである。だが、多くの國民はめくらであつた。景氣のいいでたらめな軍部の宣傳を信じきつて、戦つためだ、戦つためだと、軍部の常軌を逸した命令に、盲從して疑わなかつた。

食糧缺乏のために、犬や猫の撲殺がはげしくなつたのも、このいまわしい風潮の現れだつた。長い戦争に疲弊しきつたとはいへ、家を守り鼠をとり、人に愛されて喜ぶ可愛いこの家畜を、かつておけないほ

ど、食糧は缺乏したのであらうか。それほど追いつめられては、所詮勝負はない。犬や猫の僅かな飼料をはぶいたとて、大勢を動かすことはできないはずだ。大局を見ている人なら、こんなくだらないことに心を用いるわけではない。むしろ、戦争につかれた、すさみきつた魂に愛玩物として與え、明日の希望をわきたたせるにちがいない。食えなから犬まで殺す、なにほどの食糧が、それから得られるであらうか。かほどまでにぎりぎりに追いつめられた國民には救いはない。戦いとおす決意もにぶる。いやそれよりも重大なことは國民の心から愛を惜しみなく奪いつつあつたことだ。惨虐な心を國民の中にはぐくみ育てていたことだ。

2

奥さんの立場はますます苦しくなつた。食糧はしだいに窮乏した。自分の食糧さえことかぐようになつた。まして四匹の犬の食糧など、思いもよらないことだつた。だが、奥さんはひるまなかつた。手をつくして犬の食糧をさがした。自分の食糧を惜しげもなく與えた。自分のやせ細ることはなんでもなかつた。ブリンクレー少佐が歸るまではなんとしても生き長らえさせなくてはならないのだ。もう、終日犬のことで一ぱいだつた。

奥さんはほんとにやせていつた。愛犬家の奥さんたちが集つては、「犬も大切だけど、おからだも大事にしくつちや」とよく注意したが、奥さんは満足げに笑うばかりだつた。人から注意されるほど、犬を愛するようになった自分が、嬉しいからだつた。食糧に追われれば追われるほど、犬に對する愛情は深くなつていつた。しかし、どうしても耐えられないのは、世間の冷たい眼だつた。四匹の犬を連れて散歩にでも出ようものなら、意地わるい白い眼が、じろじろねめまわす。まともに見かえすこともできず、小走りに通りぬけると、背後で聞えよがしの皮肉な言葉がきこえる。

「この非常時に、なんとという女だらう。犬などかつて……」
「ほんとにあきれるよ。日本のこんなに苦しいのが分らないのかしら

もしかしたらスパイ……」奥さんは散歩計畫を変更して、わきめもふらずもどつてしまい、玄關の戸をかたくしめて、四匹の犬をしつかとだきしめる。悲しいのか、くやしいのか、熱いものが胸にこみあげてきて、涙がぼたりと犬の背筋におちる。犬はおどろいて身をすくめるが、そつと奥さんを見あげる。その悲しい眼、ぱつたりあつた視線、こらえていた悲しみが、一時にせきをきつて、涙が急にはらはらとあふれ出る。四匹の犬の中でいつまでも泣いている日が多くなつた。

戦局は愈々緊張してきた。連合軍の本土空襲は火を見るより明らかだつた。国内は騒然となつた。

敵に對する好意的な言動は一切ゆるされなかつた。嚴重な監視網がはりめぐらされ、些細な言動が官憲の神経にふれた。なんらの楽しみもない米英の捕虜に、人道的な立場から「お可哀想に……」ともらした婦人が、賣國奴のようにのしられた。國民はいつ災難がふりかかるかもしれない、薄氷をふむような毎を送り迎えた。

いつのまにか、國民の中には、自己をまもることにきゆうきゆうするとともに、他人の生活をさぐり求める猜疑心が芽ばえはじめた。

國民が犬を殺している中に、頑として四匹の犬をかいづける女、しかも彼女は英國軍に投じた敵國人の妻——なんで無智な民衆が見のがそう、あつらえむきの話題だつた。あの女はスパイだ。でなきや、あんなに平然と犬を飼うことができるもんか。」

日一日と憎惡の眼は多くなつていった。奥さんは、滅多に表へ出なかつた。終日うちにこもつて、犬と悲しい生活をおくつた。だが、奥さんの心の底にはプリンクレイ少佐がのこしていつた「必ず歸つてくる、そして新らしい日本の建設に身をささげる」という言葉が、はつきりやきついていた。スパイと言われようと、賣國奴とののしられようと、その日の来るまでは、犬と生き通すのだ。ますます破壊へ進みゆく日本の盲動を悲しく見すごしながら、少佐の面影を愛犬の背に思うかべて、世間の侮蔑をじつとたえしのぶのだつた。

昭和十九年が暮れて、昭和二十年が明けた。戦局はヒリッピン作戦が米國の大勝裡に終了し、沖繩決戦に移つた。三月には米國軍の大編

隊による本土空襲が敢行された。いよいよ戦雲は内地をおおい、米軍の本土上陸は必死の勢いとなつた。軍部は狂氣のように本土決戦を叫び、婦女子にいたるまで竹槍戰術を強要した。山間僻地にいたるまで血ばしり、國中殺氣だつた。

ただならぬ戦雲は、奥さんに悲壯な決意をうながした。犬をやしない育てることは、どうしてもできなかつた。あらゆる苦しみと世の中の白眼に抗して養ひつづけてきた愛犬ではあるが、少佐がくれぐれもたのんでいつた大事な犬ではあるが、少佐が再び歸つてくるまで命を完うさせることは、どうしてもできなかつた。犬の供出は再三命ぜられてゐる。命をとめる手は、奥さんのまわりに幾重にもせまつてゐる。犬のために命をとにもする覚悟で、疎開もしなかつた奥さんではあつたが、犬を生かすか、自分を生かすかの最後の決着にいたると、いろいろと思ひわづらつた。犬と共に死することはやさしいが、少佐の再會を信じてゐる奥さんは、少佐に愛犬のてんまつを報告する義務がある。そう考えると、うかつに死ねなかつた。それに犬は少佐が歸るまで、どうしても生きとおせない運命を負わされている。のこされている道はただ一つ、人手にかけず自分の手で殺すことだつた。ああいやだ、自ら手をくだすことが、愛犬にそそぐ最後の愛情だとは……奥さんは二日も三日も寝もやらず思ひなやんだ。しかし方法はない。心を鬼にし、少佐にわびながら、懇意な獸醫に死の注射をたのんだ。

四月の下旬だつた。犬は知つてか知らずでか、ことさら奥さんにしつぽをふつて、じやれつた。精魂こめた最後の御馳走を與えながら奥さんは心で泣いた。ただ一つ、奥さんの心を救つてくれるのは、恐らくこのいたましい出來事を許してくれるであろう、少佐の大いなる愛の心であつた。それを唯一のたよりとして、思ひきつて獸醫に目くはせした。注射針はとりだされた。奥さんは目をふせた。一本、二本、三本、四本、萬事おしまいだ。犬はおとなしく苦しみもせず死んでいった。

「愛するがゆえに殺す、なんという皮肉な、運命だろう。いまわしい戦争のぎせいだ。奥さんは、心のこおる思いで、いつまでもいつまでも、犬のむくろのそばに悄然とすわつていた。」

編集後記

中國にこんな話がある。

汚ない苦力が、南京豆のおおきな袋を、荷車ではこんでいた。道はでこぼこで、呼吸はあえぎ、からだは汗でびっしょりぬれていった。がたん、車は大きく揺れ、おちこんだ。そのはずみに袋が落ちて、南京豆は道路一めんに散亂した。苦力はしゃくにさわつて、ぶんぶん怒りながら豆をひろひはじめた。通行人はたちまち彼をとまりまいた。散亂した南京豆の中でせつせと拾いあつめている苦力の格好は、すこぶるおかしいものであつた。みんなはくすくす笑いながら、のんびり眺めている。苦力は、人の災難を笑う彼等がうらめしかつた。ますます怒りながら豆を拾つた。しかし、豆は際限がない。通行人の笑いも止まなかつた。はげしくなるばかりだつた。と、苦力はおかしくなつた。いつ

のまにか、通行人の笑いに同調してげらげら笑いだしてしまつた。

今の日本は、いろいろの複雑した條件で怒りたいことばかりだ。しかし怒つては、世の中は一そう暮しくくなる。怒りたいことを笑つてこそ、世の中のもつれもとけてくる。通行人の笑いで苦力の怒りが消えたように、今の日本に最も必要なものは、笑いであろう。しかし、笑いは、調和された、圓滿な精神から生れてくるものだ。こんな追いつめられた時代に笑えるかと怒る人があるかもしれないが、不自由な時世だからこそ、出来るだけ心をなごやかにして笑いを生活に導入すべきではないか。心の豊かなゆとりある精神生活に精進すべき時ではないか。私は中國のこの一笑話を讀んだ時、笑う門には福來たるという我國古來の諺をすぐ思い出したが、しかしそれよりも、佛の柔和な、三十二相好の圓滿なお姿を、はげしくあこがれていた。

▽先號は印刷所の都合で——電氣の制限で一週二度の送電停止の上に再三の停電で、印刷事情は極度に悪化している——やむなく七、八月を合併にしました。せつかくとり戻した發行日をおくらせたくない措置です。

▽今號は初秋のおくりものとして社會の一線に働いていられる瓜生、山本兩氏の玉稿をいただきました。瓜生氏は中部日本の渉外部長でマ司令部や外人記者に知己の多い方、しかも淨土宗の信者であり、滯英中には、英文の歎異抄講話を出版された方です。山本博士は久我山工業専門學校の校長で、佛教の篤信者であり、鏑の研究の權威者です。社會生活からにじみ出た兩氏の感懷は、私たちの胸をつよくうつものがあります。▽誌代を催促しましたところ、直ちにぞくぞくお送り下さいまして感謝しております。會員並に讀者の御好意にむくいたく、専心編集プランをねつております。御期待下さい。(東)

「淨土」 九月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿二年 八月二十日印刷

昭和廿二年 九月一日發行

(定價 三圓)

東京都芝區芝公園淨土宗務所

編輯兼 中村 辨 康
發行人

東京都神田區神保町三ノ一〇

印刷人 春山治部左衛門

東京都神田區神保町三ノ一〇

印刷所 共立社印刷所

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園淨土宗務所

振替東京八二一八七番

會員番號B一〇八〇一四

會費 金 四十二圓
一ヶ年

(送料六圓を含む)

振替拂込みはすべて一圓五十錢増のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十二年八月廿日印刷納本 昭和二十二年九月一日發行

淨土 第十三卷 第八號

定價金 三圓 (送料五十錢)